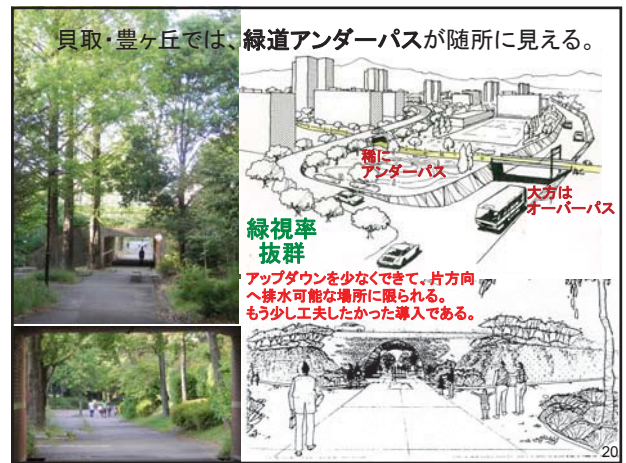
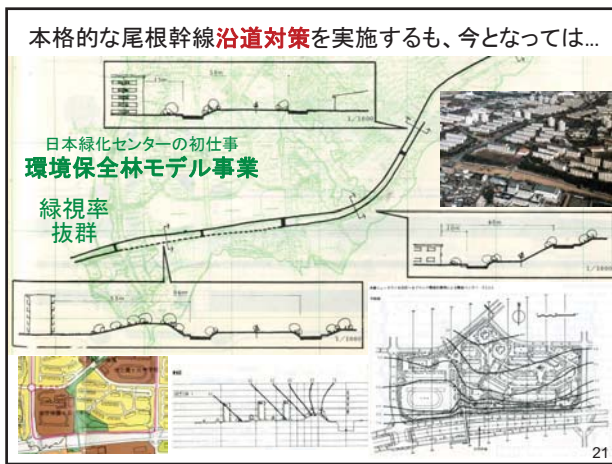


19



20



21



22



23



24



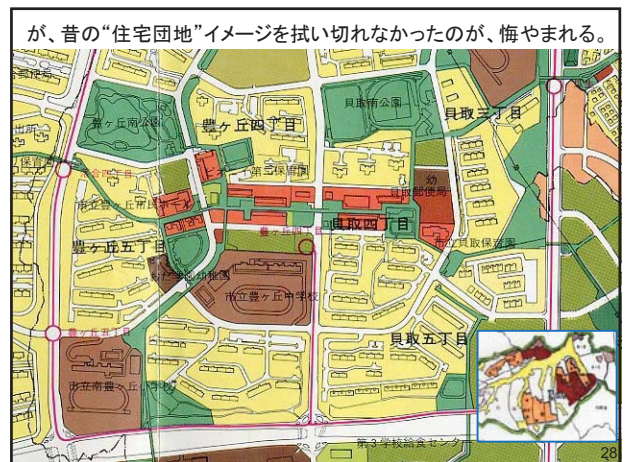
25



26



27



28



29



30

新方針で住宅建設は再開すれど、空き家だらけに
—第二次入居を迎えた昭和51-2(1976-77)年当時—

古くからの“住宅団地”イメージからは脱し切れていないが、新方針で貝取・豊ヶ丘北部の山頂を残すことができ、それが今に繋がる。

31

しかし、住宅建設を取り巻く社会情勢は大変容していた

全国で大量“空き家”発生

21世紀への豊かなまちづくりをめざして
多摩ニュータウン

オイルショックがあった昭和48(1973)年には、我が国全体では「一世帯一住宅」を実現

世の中が
変わっていた

S48、オイルショック
一世帯一住宅を実現

全てに“量”から“質”への時代転換が生じる

32

特別住宅債券者用“大型住宅”を含めて、貝取・豊ヶ丘地区から多摩ニュータウンの住戸規模の拡大が進展する。

日本人が満足する住戸面積も早々に達成

分譲住宅
土地価格の高騰
賃貸住宅

貝取・豊ヶ丘住宅建設

33

多摩ニュータウンの総人口密度は約100人/haでも、集合住宅団地(ネット)の戸数密度は約80-120戸/haである。

容積率(%)

戸数密度の目安
(専用床面積/延床面積=0.8の場合)

不慣れた特住債“大型住宅”導入で、極めて低密度の集合住宅地エリアとなる。

34

第二次入居1976-7があって、暫く後1980頃の状況である。

35

後の住宅建設状況から、当地は過渡期であった、とわかる。

36